

2-2	
主題	入浴を拒否する認知症の方が入浴をされるようになるまで
副題	入浴を拒否する方の入浴対応を標準化する試み

キーワード1 寄り添うケア	キーワード2	研究期間	24ヶ月
---------------	--------	------	------

法人名	社会福祉法人三育ライフ		
事業所名	特別養護老人ホームシャローム東久留米		
発表者：森 有里	アドバイザー：なし		
共同研究者：保谷 邦彦			

電話	042-467-1561	FAX	042-467-3040
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	生活介護課は1階が重介護の方、2階が軽介護の方、3階が認知症の方をそれぞれ対象としており、パーソン・センタード・ケア（その人を中心としたケア）の視点から、フロアごとに専門的なケアを実践できる事を目指している。今回の発表は3階認知症フロアで、利用者26名+ショートステイ2名の方が利用され、平均要介護度は3.4である。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

- ・A氏 87歳 女性 要介護度4
- ・平成21年シャローム東久留米に入所

<既往歴・生活状況>

時期不明 B型肝炎キャリア

50歳頃 痔 手術施行

H13頃 胃癌2/3摘除・胆のう全摘

H17頃 アルツハイマー型認知症

H20頃 高血圧

H20頃 腎盂腎炎

H20頃 完全房室ブロック（ペースメーカーのオペはしていない）

身体状況：日常生活自立、除脈による呼吸の乱れがある。

生活状況：日常会話など楽しむ姿がみられるも、一転、介助に強い拒否がある。その際、呼吸困難感に陥る事もある。介護拒否が見られる。

上記の事により、本人の感情面・衛生面・心臓への負担等、ケア上の課題がある。

《2. 研究の目的ならびに仮説》

- ・定期的に入浴を実施し清潔保持・感染予防
- ・快適な施設生活の提供
- ・身体（心臓）の負担軽減
- ・さらなる信頼関係の向上
- ・達成感を得られることによる職員の仕事のモチベーションアップに繋がる事への期待。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ①曜日や時間帯を臨機応変にして、本人の機嫌が良い日や拒否が無い時に対応する。また入れた時や入れなかった時、どのような対応を取ったか、どのような反応があったか等職員間で共有する。
- ②ご家族の協力で、施設で入浴する。
- ③入浴の代替え（着替えや陰部洗浄）を浴室にて対応する。そのことにより、入浴や浴室への嫌悪感の軽減や信頼関係の構築を図る。足浴・手浴対応にて清潔を維持する。
- ④認知症ケアマッピング行動計画立案へとつなげる。情報の共有。そのことにより、業務の標準化を図る。
- ⑤職員の気持ちの聞き取り、職員のモチベーションの変化を調査する。

《4. 取り組みの結果》

- ① 曜日や時間帯の変更には、他ご利用者への負担や業務負担があった。時間帯が看護師の不在時間帯だと対応困難なことがあった。行動パターンやサインを職員全体で共有できるようになった。
- ② ご家族対応で当初数回は入浴可能だったが、徐々に拒否が見られ入浴困難な状況になっていった。
- ③ 徐々に入浴や脱衣への抵抗が薄れていき、入れる時が増えていった。
- ④ 専門的視点で有資格者による行動傾向をグラフ化し数値として示すことによりケアを具体的に考えていくことができた。
- ⑤ 入浴されご利用者の笑顔を見ると、仕事へのモチベーションがアップしてより良いケアの提供に繋がった。

《5. 考察、まとめ》

今回、この研究に携わりご家族の協力、色々な角度からのアプローチや他部署への応援を経て定期的な入浴介助、清潔保持、心臓への負担軽減を図れることができた。これらの達成によりチームケアでの試みに自信が付き、モチベーションアップができた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

研究を行うにあたり、研究内容・写真などプライバシーに配慮して行う事を、ご家族に説明して同意を得た。ご家族面会時などに経過とご本人の様子を報告している。

《7. 参考文献》

・ブラッドフォード大学認知症介護研究グループ、認知症介護研究・研究大府センター監修『DCM（認知症ケアマッピング）理念と実践・マニュアル』日本語版第1刷2011

・認知症ケアマッピングを用いたパーソン・センタード・ケア実践報告集

・認知症ケアマッピングを用いたパーソン・センタード・ケア実践報告集 第2集

《8. 提案と発信》

生活介護課では、センター方式を早期から導入し、ご利用者自身が、日常生活の中で出来る事、したい事などが主体的に行える為の支援、また、その方の気持ちや習慣としてきた事、取り巻く環境についても把握に努め、「寄り添うケア」の実践をめざしている。

今回の研究にあたっては、パーソン・センタード・ケアの視点をもとに、その方の持つ可能性を引き出し、課題解決や信頼関係の向上について、チームで取り組む事が出来た。